

タイトル	桑原先生への送る言葉
著者	井上, 真蔵; Shinzo, INOUE
引用	北海学園大学人文論集(48): 11-13
発行日	2011-03-31

桑原先生への送る言葉

井上真蔵

「アメリカからマックを持ってきたのだけど、どうもキーボードの具合がおかしいので、先生のキーボードで試させていただけませんか？」これが桑原先生との最初の出会いであった。かれこれ20年前の北見でのできごとであった。以来、人文学部の開設にともなって札幌に移ってきて、研究室も隣り合わせになり、公私にわたりほぼ20年間のおつきあいをさせていただいたことになる。そのような経緯はあったものの、先月最終講義という形で初めて先生の講義を拝聴させていただいた。平易な言葉使いでありながら奥の深い内容を学ぶことができ、このような講義を受けた人文学部の学生は幸運であったと言えるだろう。私にとっては最初で最後の講義であったが、先生との日々の雑談の中で、北米文化や異文化理解についての知的刺激を得ることができたことは大いに喜びとするところであった。学ばせていただいたことは数多くあるが、中でも特にこれまでで印象深いことがらについて触れたいと思う。

桑原先生に接して、誰もが等しく印象深く心に残ることは、そのお人柄であろう。廊下ですれ違った時も、ご自宅に電話をかけた時も、まず耳に飛び込んでくるのが、あの朗らかな元気な声での挨拶である。誰しも、体の具合の悪い時もあれば、気分がすぐれない時もあり、そんな時には声にも自然と現れがちである。ところが桑原先生にはそんな様子は微塵もない。ある時に「ほんとうに、いつも元気ですねー！」と言うと、「元気じゃないよ。実は……」と、話してくれたことがある。相手に対する心遣いと先生のお人柄を垣間みる思いがしたものである。『明るく元気な声』をモットーにするのは容易いことであるが、それを実践するのは容易なことではない。明るく元気な桑原先生のところへは、自然と学生も集まり、勉強だけでは

なく何気ない会話の中にも多くの学ぶべきことに触れることができたようである。さらに若い人たちにとっては、おそらく20年後30年後になるだろうが、桑原先生の話し方や立ち居振る舞いを思い出し、あるべき規範として自己の中に残っていることを知ることになるだろう。

このような先生のお人柄については誰もよく知る場所であるが、私の中にさらに強烈な印象として残っていることがある。それは、全く異なる日本文化とアメリカ文化の良い側面を持ち合わせ、両方の文化に対する異文化インターフェイスをお持ちだということである。先生は20年近くアメリカで生活なさったと伺っているが、確かにその影響によるものであろう。そして、同時に、「日本の心」を失うことなくアメリカ的合理主義を身につけられている様は誠に敬服すべき点である。何よりも、ご自分の住居を建てるにあたり、全てカナダから輸入されたと聞いた時には思わず声を失った。単にカナダから建材を輸入するだけであれば、珍しい話ではない。しかし、設計図を描いてカナダに持って行き、現地で依頼して大工さんも内装屋さんもバンクーバーから来てもらったとなれば、話は全く別である。日本のハウスメーカーの半分のコストで建てることができると分かっている、普通はなかなか実行できることではない。日本の工務店に依頼し、日本人の大工さんに建ててもらうのも、家一軒が完成するには並大抵のことではない。それを、北米の設計屋さん大工さんなど、まさに北米の文化と行動様式を持つ人たちを相手にして、北米の空間を札幌に作り上げたのだから、異文化コミュニケーションの実践版そのものである。北米流の考え方、北米流の行動が知識としてあったとしても、それを現実に実行するのは容易なことではない。そして、その過程には、それぞれ日本の常識では考えられないような問題も多数起こったようであるが、その一つひとつを解決していき、北米住宅を札幌の地に完成させたのであるから、そこに先生の理論と実践の一致をみることができると言えるだろう。以来、見習おうとはしてきたものの、なかなか真似のできないことであるというのが実感である。

研究室が隣り合わせだと、何となくお互いの雰囲気伝わってくるもの

である。時おり微かに聞こえるクラシックの音楽，壁の向こうで蛇口をひねりコーヒーの用意をする音。4月からはその物音も聞こえなくなるが，慣れるのに時間がかかりそうだ。しかし，引き続き札幌にお住まいなので，電話の向こうでは朗らかなお声を聞くことができるだろう。先生，いつまでもお元気で。